つるかめ梅

金岸撰

027
303
1

藏書

蘭

愛知女専
第11430號
圖書

二三三

七幸の

和尚の書のあふしをしとやてうもこ
ゝろ
ゆかりとそのゝ人なりけりと思ふよ今
月比面の寺にてあやめ面白の花も
盛んなる御之幸の梅をれく唱ゝ寄居
主のまりへる事ふさ事ゝ養主の和歌
無常ゝ百意集の独吟ゆく路ゝ梁と
なりさきんとなり

宝暦四甲戌春二月　　宝海寺　安尋

神祇　雜之句　　宗袋獨吟

海表ゝゝゝ

法免こんの御恩を正直に奉
仕をする生涯逆涯山おろし
河内のうそを誓文くせ
面方のもくもくもくもくこうがら
板ろ蒼木よろしひろめる
蛍火のかがやく神の自腐し
生きくるをるる院茶を幅
地あるの法守る田畠ちくちく

太敷の堅ふ敷はる月年
咲花み日待の望は月を蕊し
増ますますくるんるる恐忘
遥拝も叶ハ如意ようも象
出雲へ去のふ姉の新為
法速引く研屋ろやくくるる原
神馬如も免ろもふの先車
御火焼のくらふ付山うつ

祝詞よ殿の茶かしこう
思ふもよりの名は咲くくと
流く潤ゆく深は毎面
貴く尊く貴きしい物の名
蹴上く鞠よ忌年とうも
竹きも制屑うきこかは自
絵るうぬけく蒸い孔ろ
孔宮よむもつふまことひも常

木社へ乾む傾牌者孔
浮橋の名へも印しい夕名よ
名れとよ名ろ藤戸羽来
玉拾よ花の寸とは精稜して
幣ふも探はあくいまくあふ

釋教　雜之句

雲水一生禪を学ぶ小比叡

仏法僧世にくあけいのこ

えくんくを乱るぬをハ啊くもくく

実名く空なとくあ物ずう

あへ吹く風ふう自もあくくく空

木のふよ茶く伐　杌のあを

ウ

名く芋を嚙く言葉ふ喉ひひ

[illegible]

燒[illegible]松も[illegible]

[illegible]

[illegible]

五幸を孤ぬ連ら乱ぶし

傘は張も衛貴女見まく

見く十枚は陰ら成法

安示ぶ矢とはあぶも欲る茅り

投くも通ふ毎は桜待

陽ふうふ迫は寄る芸は月

望ら嵐とおりふ春ぶれ

ニウ

黄ひ乳の餓鬼ら和ひ一ッ家ま

鶏ふふれら家は い そ

五五生不奥ま生れまぶく

宵年は陽い炊脳の傍

木陰く乳の脳断り枝をぬケ

貧地へ伝ふふ裏は耕

無常　雜之句

桐ふさく桐なりしもかりそめの
日陰も苔は下もくの苔
枯木いつまでかあるべきさんん
あゆを忘れて出ぶそ保しき
立角も枯くうあれい自宅し
その花をきらぬ級の近級
俳部屋の道ゆ歩き食すく

ウ

[illegible]

[illegible]

何と[illegible]の木[illegible]塚[illegible]お[illegible]

名[illegible]

[illegible]

[illegible]

ちんし振舞ふあらけ舞れ
世を事、蔵の中よりれこめく
横くおとしこか面七
ふ山くまき編笠ゆ沿ふ自
言吹きとれい屋ふかゝ首
あ丁世をとばく雨の瓶火ゴ
風殺しくも煮ハ叶ふ
北神をいの世ら沼ちのふ花ゑて

二ウ

あハ世もめんの上ゆ公を据
世ゆりあんくこゑ案弱の枕めし
煮な源ち門火くも干も
ちらくゆき雲の薄世ハ風のおと
ちとらの息ちうくうくんも

夜の風雅の神とあるる

神風もかこうるつゆく梅の花

おくるみ方は仏を迎

花のつゆ雪やとけしく寒ぬ梅

寒天に似給の音鶯拾拾

白うなれて花の舎利やむ夜の月

空海計

饒之匠猿の集は中より一句の立様撰入をふる
度く毒門の風儀をつゞ一句一味の事実様
[illegible]一句より発端の古をつゞ[illegible]七
[illegible]百余百十章とあゝ[illegible]つむぶ[illegible]
[illegible]ふと先徳の[illegible]をあやまり[illegible]
[illegible]を口ようつゝ[illegible]松尾の庵を補[illegible]是[illegible]
[illegible]庵の[illegible]と[illegible]我徒の[illegible]命を[illegible]
仏[illegible]の半[illegible]蕉主の[illegible]

一句の立

[illegible]撰

[illegible]の[illegible]る[illegible]の[illegible]ひもの
[illegible]を[illegible]

大松[illegible]

[illegible]の[illegible]

雪の[illegible]

[illegible]の[illegible]内
[illegible]

この寺にも風もあるべし
振袖あやの袖のもうさいる
牛塚の苔を何をとかふきて
ものふるしらふ寺の遺もの
うるうも贄ハ塚下の船
塚都の渡りもそて中吉り
海そこハりも芝原の山うつ
芝吹色しそ口ひろ川

うつうつ○ふるゆもの蓋
爲帽るうつ下ハ廊こ奪る人
畑の又へふるが町ゆ果
ゆんくの美又をむひこ宮し
枇さく門下緑ゆうあ
変笠の刹屑あるてかるふ
村中一案白敷へこ敷し
風も一業ふく古寺

[illegible]
寺の[illegible]も苗代へむく

[illegible]
新[illegible]

[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]

[illegible]
古寺を[illegible]の[illegible]

[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]

四五尺くらいの大きさの猫を畫て遣
猫はゆきさんの狂言の相手
月高くうこく石菖は香
遣りのを押へ〳〵ぶら〳〵涼しう
くらいの中にてうぢの者
茶屋を大力みし〳〵皆負ふ
夕日の新ふ橋より博論
佛檀〳〵熟林る中〳〵遠より合さ

古軒ろるるもの足よりけ〳〵蛍
刷毛を雲ハ〳〵〳〵遠入ふ佛檀
楊枝くらべさん人も出〳〵ぶふ
舟茶の別をハ雲もうとくく
ハっうハタ日はりれふ位右ヒ
女はそれをまく涼殿
小倉を〳〵〳〵〳〵はれ風
佛檀より陽雲はみ上〳〵青

[illegible]年の春より余和の[illegible]月
仮橋ゐをとゝ[illegible]
木の[illegible]もの[illegible]
数載[illegible]
[illegible]
又男の[illegible]
[illegible]
[illegible]

馬宗のあたりにかこうの男も
法ゝゝ次ゝ蓮花ゝ後
永くよ元山ゝゝゝみ本土
繁ゝよかくゝゝ戻ふ拾ゝ
唐津焼おもあふるゝ胃中ゝ
京ゝぬけゝふ茶ゝ松原
袴ゝぬ係もゝ本ゝかゝこゝ
かくろゝ益ゝ立ゝ拾ゝ

ゝれゝゝのけゝ茶ゝ函ゝ
外茶の下法ゝゝ思ひ切
掾ゝつゝゝ踊ふ切ゝ
ゝ山い碁盤ゝ後ゝ
茶殿の遠ゝゝゝ
虫の山ふかゝつゝ人
ゝゝ橋ゝ夕日ゝやけ空
ゝゝゝ四ゝ拾ゝ

戸を出ぬさしもの恋路
待て待て妹に頃くり
又出し沉井をみを川さく
春日の目を感ずまさをし
すりぬるく出り人は奈者
大野の鶴くゝ橋本りあり
きをまいたんこの歌を見ふるく
武御七一星歌く初芝居

去冥る藪をくまいに旭うゝ
漏うちあゝく貧僧は鄙
橋猫もきてに塩紙は花
歌星の奈の中へ春ゝ

寛暦四甲戌季五月吉日

東武日本橋通一町目　梅村宗郎版

叢桂堂藏版誹書目録

南北物語　論篇上下　涼岱

伊勢のはま　武山　雙亀

枯野問答　仝　百梅

百題集　仝　百梅

いせ物語　東武　李超

物語餘負　續之足猿　涼岱　連中

東武林社中　一句立　東武　桐原

秋無　稿家のやう　仝　林水　葱里

ふるやしき　浮世草子　涼岱

涼岱独吟　意の百題　涼岱

海乃きれ　李超

ちりすこ　仝

はかり仲捨遺　雲洞

はれ日の梅　涼岱

續白意集　仝

江都日本橋通壹丁目　梅村宗五郎